

維新前夜 ～佐幕か倒幕か～

① 幕府に殉じたものたち

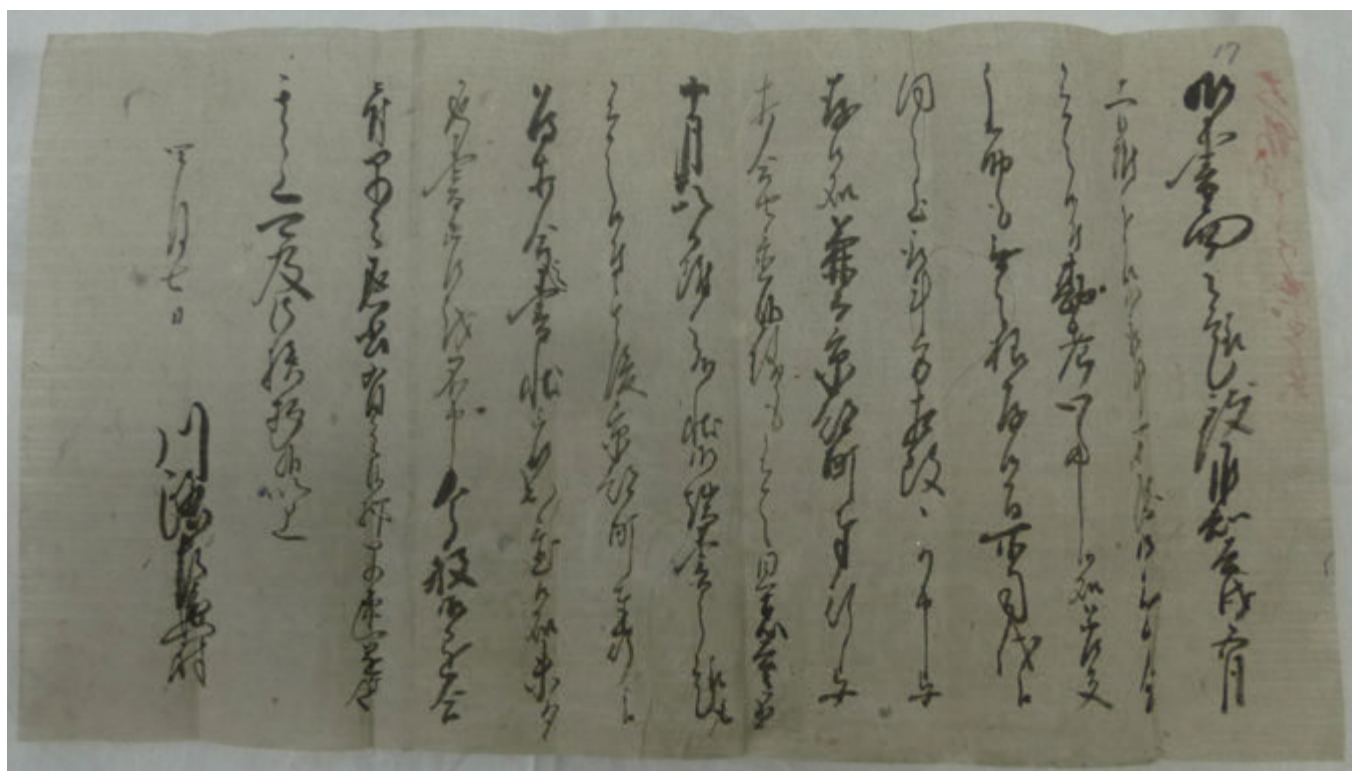
慶応4（1868）年3月15日、無血開城を控えた江戸城に、一発の銃声が響き渡りました。弘化3（1846）年から嘉永4（1851）年、奈良奉行時代の治世が近年とみに注目を集めている川路聖謨が、いわば幕府に殉じて、ピストルで自害した際のものでした。

川路は現大分県生まれ。父に従って出府後、下級役人として幕府に勤務しますが、水野忠邦に才覚を見いだされて抜擢されます。奈良奉行の後は大阪奉行や勘定奉行を歴任し、ロシアとの外交交渉に当たったことも著名です。

奈良奉行所の与力を務めた中条家文書に残る「川路左衛門尉（聖謨の官名）書状」には、奉行間での所轄に関するものや、寺院などが貸し付けた銀子の訴訟に関する内容のものがあります。川路の治世を補佐する与力の執務の中で残された、案または控と考えられ、原本ではありませんが、奈良奉行川路の一端をうかがわせるものです。

勝海舟・榎本武揚など、江戸幕府と明治政府の両方で頭職を務めた人物も多い中、川路同様幕府とともにこの世を去った奉行として小栗忠順がいます。小栗は領地に隠遁したところを新政府軍に殺害されました。大君専制による国内政治改革を目指した小栗でしたが、横須賀造船所建設などその事業は、明治政府にとっても大きな財産として継承されていきます。

下級武士や上層農民出身者で結成された新選組では、路線対立にともなう内部抗争が頻発しています。しかし、もともとは京都守護職松平容保のもとで京の治安維持、つまり尊攘派志士達の弾圧にあたり、後多くの隊員は戊辰戦争で旧幕府側に立って転戦したという点では、同様に幕府と命運を共にした組織といえるでしょう。



(中条家文書より) 川路書状 (請求記号：7-3-17)

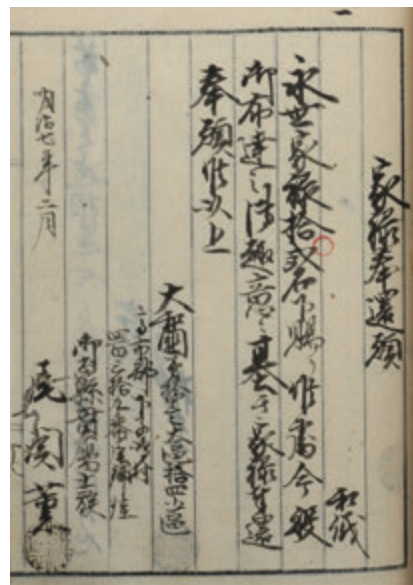
維新前夜 ～佐幕か倒幕か～

② 奈良にゆかりのある新選組隊士たち

武蔵国出身者の多い新選組ですが、隊士の出身地は全国に広がっており、大和国出身者も 3 名いました。ここでは、大和国にゆかりのある隊士を含めた 4 名を紹介します。

尾関 雅次郎

高取藩出身。文久 3 (1863) 年に入隊し、諸士取調役や伍長のほか、行軍時には旗役を務めました。その後、会津戦争では歩兵指図役、箱館戦争では第二分隊指図役として出陣し、終戦を迎えます。壬生浪士組時代からの隊士のうち、戊辰戦争終結まで戦って生き残ったのは、島田魁と尾関だけでした。戦後は高取藩預かりとなり、明治 3 (1870) 年の赦免後、尾関薫と改名。当館所蔵の公文書にも「永世家禄拾貳石 高市郡下子嶋村住 奈良県貫属士族 尾関薫」の文字が見えます。明治 25 (1892) 年に死去。享年 49 歳でした。



明治七年二月ヨリ八年七月二至ル
旧高取県之部 家禄奉還願 戸籍掛
(請求記号：1-M7-18)

尾関 弥四郎

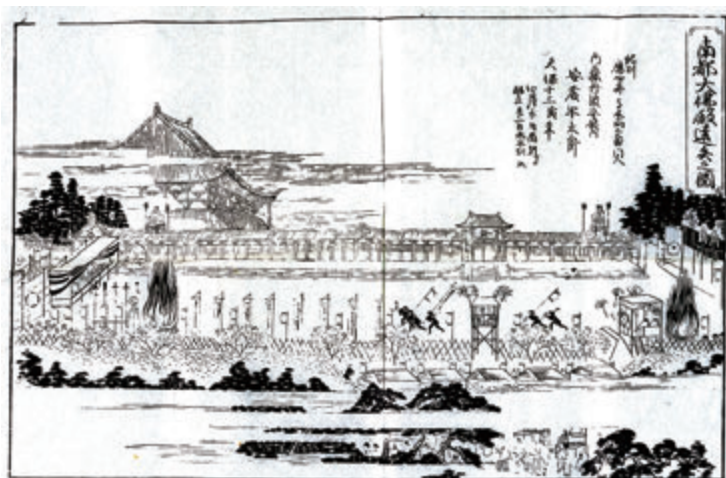
尾関雅次郎の兄。元治元 (1864) 年 6 月の池田屋事件にも参加していますが、翌年に 35 歳で病死しました。墓は、弟とともに高取町の越智山行雲寺にあります。

橋本 皆助

大和郡山藩出身。慶応 2 (1866) 年 9 月の入隊ですが、翌年 3 月には伊東甲子太郎率いる御陵衛士に入ったので、在籍は約半年でした。その約 5 ヶ月後には陸援隊に入隊し、水野八郎と改名します。陸援隊隊員後、慶応 4 / 明治元 (1868) 年に水野 (橋本) は新政府の軍務官軍曹に任命されますが、後に免職されて帰藩し、明治 4 (1871) 年に 37 歳で亡くなりました。墓は大和郡山市の常光寺にあります。

安藤 早太郎

三河国挙母藩出身。弓の名手で、天保 13 (1842) 年 4 月に東大寺大仏殿西回廊で通し矢奉納を行い、当時の記録を更新しました。その様子を描いた当館所蔵の絵図には、北に射手、南に矢が刺さった的、右上に「内藤丹波守殿内 安藤早太郎」の文字が見えます。新選組では副長助勤を務めましたが、池田屋事件で深手を負い、その傷がもとで翌月に死去。享年 44 歳でした。



南都大仏殿遠矢之図 天保 13 (1842) 年 (請求記号：T-1-20)
※まほろばデジタルライブラリーで公開

【参考文献】

- 日本史協編『會津藩廳記録 五 (覆刻再刊)』東京大学出版会 1982 年
- 古賀茂作、鈴木亨編著『新選組全隊士録』講談社 2003 年
- 菊地明、伊東成郎編『新選組史料大全』KADOKAWA 2014 年
- 新人物往来社編『新選組銘々伝 第 4 巻』新人物往来社 2003 年
- 奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史 3』奈良市 1988 年

維新前夜 ～佐幕か倒幕か～

③ 武力倒幕のさきがけ

作家の菊池寛は、小説『天誅組罷通る』を執筆していたところ、「しばしば新選組と混同された。思想や行動は全く逆なのに」とぼやいています。

天誅（忠）組事件とは、孝明天皇の攘夷祈願大和行幸の先鋒を称し、藤本鉄石、松本奎堂、吉村寅太郎ら尊攘派志士が公家中山忠光を擁して挙兵した事件のことで、文久3（1863）年8月17日には五條※代官所を襲撃して代官を討ち取っています。しかし、翌日には8月18日の政変が起き、後ろ盾だった長州藩が京から放逐され、行幸自体が中止となりました。

天誅組は十津川郷士を糾合して高取城を攻めますが敗北。それまで日和見を決め込んでいた周辺諸藩も、京の政変を受けて追討側にまわり、加えて十津川郷士も中川宮の指示により天誅組勢から離脱します。その結果、関係者の多くは戦死または刑死という結末をたどります。

しかし、はっきりと武力での倒幕を意識しての挙兵、蜂起という点で「明治維新のさきがけ」と称されています。

※「五条」と表記される場合もありますが、本展ではすべて「五條」に統一しました。



松本奎堂先生像 生誕地碑

明治三十四年三月

列谷町発行 松本奎堂伝発刊記念えはがき より



『愛国百人一首』絵札より

維新前夜 ～佐幕か倒幕か～

④ 伴林光平と平岡鳩平（北畠治房）

奈良に関係の深い天誅組参加者として、伴林光平（1813-1864）と平岡鳩平（1833-1921、後の北畠治房）を挙げることができます。

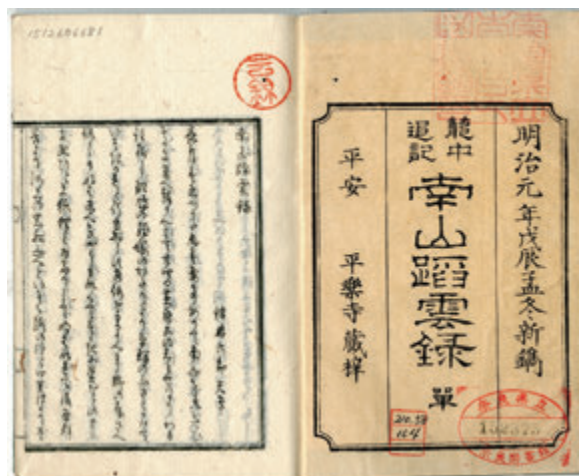
伴林は現藤井寺市の僧侶の家に生まれ、八尾で住職となるも「もとこれ神州清潔の民、誤りて仏奴となり同塵を説く、いまにして仏を捨つ」と還俗、転向を宣言したという経歴を持っています。その後法隆寺村に住み、「野山のなげき」に結実する山陵調査などに打ち込みます。平岡に知らされて参加した天誅組では記録方を務めました。捕縛後奈良奉行所の獄につながれますが、奉行所には伴林に学恩を受けたものも多く、ここでの処遇は寛容であったとされます。獄中で、後世に事件の基本資料となった回顧録「南山踏雲録」を記しえたのもそのためです。しかし、京都所司代・守護職は厳罰方針をもって臨み、伴林は京に送られたうえ、文久4(1864)年2月16日、同志18人とともに斬首されました。

法隆寺村生まれの平岡は、中宮寺に仕える一方で、尊王攘夷派の志士と交わり天誅組に参加します。事件後は辛くも逃亡し、戊辰戦争では新政府軍に従軍、北畠治房と改名した維新後は司法官僚として大阪控訴院長などを務めました。大隈重信と深い関係を持ち、立憲改進黨の結党にも参画しています。

伴林と平岡は師弟関係であるとともに、行動を共にすることも多かったのですが、天誅組事件での逃避行では最終的に別行動を取っています。二人の明暗は分れましたが、「南山踏雲録」では、この件で平岡への恨み言を述べています。これに対して、北畠と名を変えていた平岡も、晩年の著作『古蹟辨妄』で、南朝の賀名生御所比定をめぐる伴林説を否定する叙述の中で、伴林が恨み言を記した際には錯乱していたと異論を唱えています。



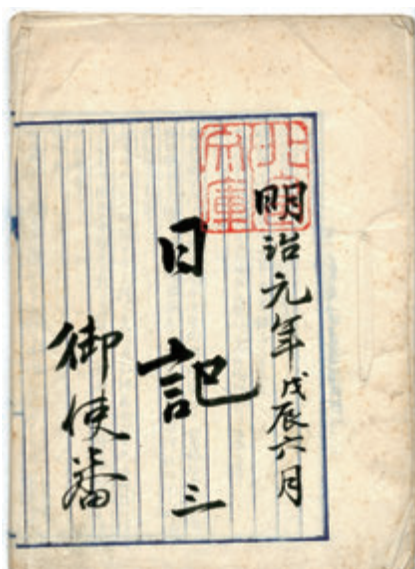
藤田文庫 伴林光平と奈良 より



伴林六郎光平〔著〕『南山踏雲録』（請求記号：210.58-ナンサ）



北畠治房肖像



明治元年戊辰六月 日記三（請求記号：88-2-12）
江戸における新政府軍構成諸藩の動向を記す日記で、東征軍大総督有栖川宮に從っていた平岡によるものか。

【参考文献】

- 鈴木純孝『伴林光平の研究』
講談社出版サービスセンター 2001年